

日本語学習者のための聞き手再認識化用法に 関する一考察

－ 「だろう」と「でしょう」の共起する形式を対象に －

権 城*

本研究では聞き手の認識を再び活性化させる再認識化用法の「だろう」と「でしょう」がどのような形式や表現と共起しているのかを考察した。「だろう」と「でしょう」の再認識化1の場合は動詞が多く使われ、現在形と過去形もほぼ同じ割合で見られた。また「見ろ」「だって」「ほら」「さっき」などの表現が共起していた。「だろう」と「でしょう」の再認識化2の場合は動詞と「じゃない」や「わけない」のような否定形式が多く使われていた。また、聞き手を再認識化させるために付随的な役割をしている表現で「だって／(だ)から／なんて／仮定表現」などがよく共起していた。「だろう」と「でしょう」の再認識化3の場合は主に動詞と名詞が使われていたが、動詞の中でも「言った(「言っている」と「言っていた」を含む)」という動詞が46文現れていた。また「って」という表現も34文で共起していた。「って」以外にも「だから(文頭の「だから」)」「だって」「いつも」「前にも」「何度も」などのような表現が共起していたが、これらの表現も再認識化3の用法として機能するのに付随的な役割をしていると考えられる。また、再認識化3の場合に名詞が使われる場合もあったが、殆んどが聞き手の職業や立場などを表している名詞であった。学習者は「だろう」と「でしょう」を学習する際に再認識化用法でこのような形式や表現が共起する傾向があることを学習しておく、実際の会話の場面に役に立つと考えられる。

キーワード：だろう(でしょう)、聞き手の再認識化、共起する形式、付随的な役割
(다로우(데쇼우), 청자의 재인식화, 공기하는 형식, 부수적인 역할)

1. 研究の動機と目的

日本語の推測表現の中では様々な表現があるが、その中で一番よく

* ハンパット大学校 日本語科 講師、jkkyks84@daum.net

使用されている形式には「だろう」と「でしょう」(以下「だろう(でしょう)」と称する)がある。また、「だろう(でしょう)」は「主観的な推測を表す」という用法で使われ学習者は他の形式よりよく使っているようである。しかし、朴英熙(2008)では、「だろう」の実際の会話文での推測用法は聞き手指向性がそれほど高くないと説明しており、推測用法より確認要求用法と同意要求用法が多く使われていると述べている。このことは推測用法だけでなく確認や同意要求用法もきちんと学習しなければならないことを示唆している。

しかし、会話文で同意要求用法のように見えるが、実際は聞き手の認識を活性化させる機能の「だろう(でしょう)」が使用される場合がある。

例1)「綺麗な、赤い薔薇が…だけど…棘が生えているだろう。」
(薔薇のない花屋)

例1)の「だろう」は聞き手に同意を要求しているのではなく、聞き手に「棘が生えていること」を見てほしい気持で発言し、聞き手の認識を活性化させていると言える。このように、「だろう(でしょう)」には聞き手の認識を活性化させる用法があるが、日本語学習者(以下学習者と称する)は推測用法より多く使われている「だろう(でしょう)」の要求用法の中でも例1)のような用法を学習しておく必要があると考えられる。

そこで、本研究では聞き手の認識を活性化させる用法の「だろう(でしょう)」にはどのような形式や表現が共起しているのかをみてみることにする。また、そのような形式や表現の共通される性質を探ることにする。

2. 先行研究

2.1 「だろう」の要求用法に関する研究

朴英熙(2008)では、「だろう」を会話体と文章体に分けて説明している。会話体は聞き手指向性を持っているが、文章体は聞き手指向性を

持っていないとしている。また、推量用法では聞き手指向的な発話とそうでない発話でも実現可能であるとし、確認要求や認識要求では必ず聞き手指向的でなければならないとしている。朴英熙(2008)では会話体での推量用法は、文章体で現われる割合よりは少ないが、要求用法に次ぐ意味・用法であるとし、会話体で使われる推量用法の「ダロウ」は聞き手指向性がそれほど高くないとしている。会話体で「ダロウ」の推量用法は談話の中で相手をあまり認識せず、自分の考えを推量・判断する思考の流れを表すと言ひ、会話体で「ダロウ」は大抵、要求用法として用いられると言っている。「ダロウ」は文章体の中、推量用法と疑問用法で主に使われていることが分かるとし、会話体での「ダロウ」は推量用法より要求用法でよく使われていることが分かるとしている。

今までは主に「だろう」の推測用法が中心となつ研究が多かったが、朴英熙(2008)の説明でも見たように「だろう」の要求用法についても考察も行う必要があると言える。

権珍美(2001)では、「だろう」の用法には推量・確認要求・疑い・感嘆以外に、仮定用法と羅列用法があり、確認要求用法以外にも、同意要求用法が存在すると述べている。

また、「だろう」の要求用法について要求とは、強く相手に要請することである行為を求めたり、行動の基礎となる深層の内面も含まれている幅広い意味であるとしている。要求という行為は必ず相手が存在しないといけないとし、そのような条件下で考えられるのは領域と情報量であると主張して以下のような例文を出している。

例2) A: おひとりで大変でしょうね。

B: ええ。いままで何もしなかったから。

例2)で重要な情報は「ひとりで大変だ」ということであるとし、この場合、聞き手は自分のことを確認しようとする話者の確認質問に対してそれが正しいかどうか真偽判断ができるとしている。

例3) 妻：携帯電話って、電話代も高いんでしょ。

夫：うん、少しね。

例3)では、話者はすでに携帯電話についての情報を持っており、持続的に現在に至るまでその情報を持っていることが分かるとし、この場合、話者の情報は旧情報であると言える。例5)では話者と聞き手両方が同一な条件下にいますが、例6)では話者は聞き手より以前に情報を得ているという異なる条件が設定されているとしている。権珍美(2001)では、要求用法の「だろう」は韓国語の「(이)지」「겠지(겠죠)」「잖나」で現れるとして以下の例文を出している。

例4)

夫：サルがね、ほら、缶ジュース飲んでるだろ？

妻：ええ。

夫：あの缶、サルが自動販売機で買ったんだって。

남편：원숭이가 말이야, 저 봐, 깡통주스 마시고 있지?

부인：예

남편：저 깡통, 원숭이가 자동판매기에서 산 거래.

例5)

青年：じゃ、一日のうちに何回も、物売りの声_がして、うるさかったでしょ。

おばあさん：そんなことないよ。今のような録音テープじゃなくて、人の声だったからね。

청년：그럼, 하루 동안에 몇 번씩이나 행상인의 목소리가 나서 시끄러웠겠죠.

할머니：그렇지 않아. 지금 같은 녹음 테이프가 아니라 사람의 목소리였으니까.

例6)

課長：どうして？

社員：終電に乗る時、走れるように。

課長：そんなにおそくまで飲まないよ、うちの会社は。

社員：そうですか。じゅ。走るのはやめます。

課長：いや、走る練習はしたほうがいいよ。けさも遅刻だろ？

과장：왜?

사원 : 마지막 전철을 탈 때 달려가서 탈 수 있게요.
 과장 : 우리 회사는 그렇게 늦게까지 안 마시네.
 사원 : 그렇다면 달리는 그만두죠.
 과장 : 아니, 달리기 연습은 하는 게 좋을 거야. 오늘 아침도
 지각이었잖나?

権珍美(2001)

しかし、例6)は話し手が聞き手より情報を持っていないため聞き手に確認しているとは言えない。同意要求のように見えるが、話し手は聞き手に同意を求めているのではなく聞き手に「今朝も遅刻したことはよくないよ」という気持ちを聞き手に伝えたい場合である。権珍美(2001)ではこのような場合については説明されていないようである。

2.2 「だろう」の聞き手再認識化に関する研究

金水 敏(1992)では、「だろう」の用法を「だろう1」と「だろう2」に分けて以下のように説明している。

『「だろう1」は典型的「推量」用法であり、蓋然性判断を表すといえる用法である。「だろう2」は、聞き手に当該の情報を思い出させたり注意を喚起する目的で発話されるものであり、「推量」の枠からは外れるものである。(中略)「だろう2」は基本的に文末の表現である。これは、「だろう2」が、何らかの意味で、聞き手の知識に働きかけ、反応を期待する表現であることと関係がありそうである。「だろう2」の代表的な用法を挙げれば、次のようである。

- a. 聞き手の眼前の事物に気づかせる。
 例7) : ほら、あそこに煙突が3本見えるだろう。
- b. 話し手と聞き手の共有体験で、聞き手が忘れていたかも知れないことを思い出させる。
 例8) : うちのクラスに田中っていただけだろう。
- c. 話し手が以前聞き手に教えたことを思い出させる。
 例9) : だから言っただろう、先にふたをするとよくないって。

- d. 聞き手が以前話し手に言っていたことを確認させる。
例10)：給料が入ったら払うって約束だろう。ちゃんと払えよ。
- e. 話し手と聞き手の共有知識から帰結される事柄を確認させる。
例11)：(共有知識：誰でも16にもなれば善悪の区別がつく)
おまえだって16なんだから、やっていいことと悪いことぐらい分かるだろう。』金水 敏(1992)

また、以下のような説明で「だろう1」と「だろう2」の違いを説明している。

『「だろう」は発話時に行われた推論の帰結を間接経験的領域に書き込む旨を宣言する標識である。書き込む先が聞き手の直接経験的領域(話し手にとってはこれも間接経験的領域)であるか否かによって、「だろう2」と「だろう1」が分化する。「だろう1」は、話し手の直接経験的領域にない知識を話し手が推論によって導出したことを表す標識として機能する。「だろう2」は、情報伝達にとって関与的であり、かつ知識ベースには存在するはずであると推論されるのに、聞き手が忘れてい／気付いていない知識を思い出させる／気付かせるために用いる。』金水 敏(1992)

金水 敏(1992)では実際の会話文までは見ていないが、「だろう2」の用法を中心に述べており、「だろう」には聞き手の認識を活性化させる用法があると言っている。

権城(2018)では、金水 敏(1992)に基づいて聞き手の認識を活性化させる「だろう」の用法を三つに分けて対照分析をしている。権城(2018)では、聞き手の認識を活性化させる「だろう」の用法を「再認識化1・2・3」に分けて以下のように説明している。

『金水 敏(1992)の説明に基づいて「だろう」を聞き手に対する再認識化用法として三つに分けることにする。金水 敏(1992)でのaとbは再認識化1で「話し手は対話を始めやすくするために聞き手の知識や記憶を思い出させる場合」であり、eは再認識化2で

「話し手はある情報や知識を聞き手も当然持っていると思っていて聞き手に一方的に発言する場合」であり、cとdは再認識化3で「話し手は聞き手に自分が言ったことや行動したこと(聞き手もその情報や知識を持っている)を再び言って聞き手を非難したり、押し付けるような言い方になる場合」である。』権城(2018)

本研究では権城(2018)の説明に基づいて再認識化用法の「だろう(でしょう)」にどのような形式や表現が共起するのを見てもみることにする。

3. 研究方法

「だろう(でしょう)」の再認識化用法を見るために日本語のドラマの台本(9本)の中で会話文で使用されている「だろう(でしょう)」の用例文を取り出した。ドラマは日本で放送された人気があったドラマで様々なジャンルのドラマを選択した。その結果「だろう」に関しては再認識化1の文は13文で、再認識化2の文は123文で、再認識化3の文は42文であった。また、「でしょう」に関しては再認識化1の文は10文で、再認識化2の文は135文で、再認識化3の文は51文であった。また、これらの文と共起する形式を取り出し、品詞と肯定及び否定、また表現という三つのカテゴリを設けて分類した。詳しくは表と例文を挙げながら考察していくことにする。

4. 調査結果と考察

4.1 「だろう」と「でしょう」の再認識化1の用法

「だろう(でしょう)」の再認識化1の場合は動詞が18文(61.1%)で一番多く使われており、現在形が12文、過去形が6文で現在形動詞が過去

形動詞より2倍使われていた。また、否定の形式は一つの例も現れなかった。以下は調査結果の表であり、例文を挙げながら見てみることにする。

<表 1> 「だろう」と「でしょう」の再認識化1に共起する形式及び表現

形式及び表現	現在形	過去形	合計
動詞	ある2、見える2、生えている1、歩く1、落とす1、映っていない1、話している1、している1、話題になっている1、番号が入っている1	あった2、いた1、出た1、濡れていた1、なっちゃった1、	12(37.5%)+6(18.7%)=18(56.2%)
名詞	寂しがりや1、馬1		2(6.3%)
形容詞	多い1		1(3.1%)
他の表現	ことがある1、だった1		2(6.3%)
共起する表現	だって2、ほら2、さっき1、見て1、ここに1、95年に1、300年前に1		9(28.1%)
合計	26(81.3%)	6(18.7%)	32(100%)

例 12) 「周りを見ろ！サツがウヨウヨしてんだろう！」

(クロサギ)

例 12)では「周りを見ろ」という文が使われているが、聞き手を再認識化させるために命令形を使って発言している。

例13)

「発声のリハビリは、寄宿舍でも根気良く続けてね。実生活で不便、感じてる?」「声が、出しにくくなったような気がします。」

「そっか。でも、今だってこうして僕と話してるだろう。話すときに大切なのは、伝えたいというこちら側の気持ちと、

受け取りたいという相手側の気持ちだ。」(1リットルの涙)

例13)では、聞き手は話し手と話していることはもちろんしており、話し手がわざわざ言う必要はない。しかし、話し手は聞き手に「今も声がでていいるから心配しないで」というような気持ちを伝えるために「だろう」を使って発言していると言える。また、「今だって」という表現は聞き手を再認識化させるときに付随的役割をする表現であると考えられる。付随的役割とは、ある用法がその用法として確実に機能するように手伝っている役割をいう。例えば比喩の用法の持っている「ようだ」の文で「まるで夢のようだ」のような文があったとしたら、ここで「まるで」が比喩という用法を手伝っている付随的役割の表現であると考えられる。

例14)

「…お前、ペンギン見たか。」「ええ。」

「さっきいただろう。知っている。皇帝ペンギンって、子育てする夫婦は、絶対に浮気しないんだって。」(1リットルの涙)

例14)では、話し手は聞き手に皇帝ペンギンのことについて話したいことがあるが、聞き手に皇帝ペンギンのことを再認識させるために「だろう」を使って発言している。また、「さっき」という副詞はこのような聞き手の再認識化を手伝っている表現であると考えられる。

例15)

「鼠は鹿と狐に嫌われているらしい。そうだ。300年前に富士山の永大噴火があっただろう。あれは鼠の仕業なんだ。」(鹿男)

例16)

「木島先生は電子力研究の権医でね。本当なら今頃、うちの理工学部を仕切ってるくらいの人だ。」と栗林。「そんな人がどうして大学を辞めたんですか。」と薫。「95年に高速増殖炉のナトリウム漏れ事故があっただろう。あの事故の影響が大きくてね。」(ガリレオ)

例15)と例16)のように過去にあった事実の文が共起している場合もあった。

例 17)

「手ごたえまるでナシ。」「そう。」

「あの警戒を解くのは簡単じゃねーよ。ねえ、何で協創住宅叩こうと思ったの。」「今マンションの耐震強度偽造が話題になっているでしょう。あれは何も最近の問題じゃないの。」

(クロサギ)

例17)のように動詞の「～ている形」でも結果の状態を表す場合は動詞の進行形が使用されていた。

4.2 「だろう」と「でしょう」の再認識化2の用法

「だろう(でしょう)」の再認識化2の場合は動詞が83文(21.4%)、他の形式が104文(26.7%)で一番多く使われていた。その中でも他の形式の否定形が79文(20.3%)で一番高い比率を占めている。以下は調査結果の表であり、例文を挙げながら見てみることにする。

<表 2> 「だろう」と「でしょう」の再認識化2に共起する形式及び表現

形式及び表現	肯定	否定	合計
動詞	ある12、決まっている10、分かっている6、分かる2、思う2、ばれる2、そうなる2、お分かり1、知っている1、知られる1、行く1、そうになっている1、なる1、ことになる1、シワになる1、どうにでもなる1、使う1、上がる1、出来る1、する1、祝う1、巻き込んだん1、語り合う1、渡す1、過	頼めない1、離れない1、やっつけられない1、似ていない1、できない1、戦えない1、話さない1、いかない1、しない1、分からない1、あり得くない1、ばれない1、出来っこない1、ならない1、片付けられない1、合わない1、入れない1、しからない1、説明になっ	61(15.7%) + 22(5.7%) = 83(21.4%)

	ぎる1、過ぎ1、いる1、つけたがる1、調べているん1、惹かれちゃっている1、風邪ひいちゃう1、なってしまう1	ていない1、出していない1、ならない1、理由にならない1	
名詞	当たり前12、一緒2、もの2、大事1、裏取り1、防御1、無理1、家事1、付き物1、手がかり1、大損1、手段1、詭弁1、瞬間1、会社1、信用1、方1、はず1、落ち度1、お金1、勝手1、予知1、彼女1、自然1、こと1、話しの途中1、売れ筋1、だめ1、こっち1、危険1、人間1、10万円1、役所側1		48(12.3%)
形容詞	いい4、いいん1、しなくてもいい1、危ない1、まずい1、恥ずかしい1、多い1		10(2.6%)
他の形式	しているだけ2、するべき2、から2、かもしれない2、偶然だったん1、あるだけ1、調べるべき1、当然のこと1、備えるため1、つもりだったん1、そういうこと1、ということ1、そういうもの1、するから1、わけ1、教わること1、本当のこと1、あるはず1、やつなの1、同じ1、増し1、たまたま1、ことなん1	じゃない25、わけない23、ことない5、関係ない5、はずない4、ことはない2、しょうがない2、しかない2、ない2、じゃないわけ1、わけがない1、わけじゃない1、わけにはいかない1、仕方がない1、～もなにもない1、もったいない1、必要ない1、知らないといけない1	25(6.4%) + 79(20.3%) = 104(26.7%)
共起する表現	だって20、(だ)から11、なんて10、そんな8、たら8、そんなこと7、なんか6、ば5、じゃ5、なら5、って4、という3、というのは3、でも3、と2、から2、そういう2、そんなの(もの)2、し		144(37%)

	か2、ぐらいで2、何言ってるの2、いくら何でも2、けど2、そんなことよりも1、いくらでも1、たって1、なんだ1、既に1、何で1、ところで1、～のに1、いくらでも1、まず1、～よりもまずは1、既に1、普通1、その方が1、つまり1、バカ1、っていっても1、なんか1、とは1、絶対に1、初めから1、あんなの1、しかも1、ちゃんと1、別に1、しか1、ちゃ1、例えば1		
合計	288(74%)	101(26%)	389(100%)

例18)

「どうしてあんなこと言ったんだ。うん。どうなんだ。」

「少しボケただけです。あんなの冗談に決まっているでしょう。シカに人が乗るわけないのにちょっと考えたらわかることなのに勝手に本気にして。」(鹿男)

例19)

「もうそろそろ自分の為に何かやりたいの。」「洋介私立に入れたのは誰の為だよ。」「洋介の為に決まってるでしょう。」

「無理して私立入れたのもこの家買ったのもお前が自分の為にしたことじゃないのか。」(アラウンド 40)

例18)と例19)のように動詞では「に決まっている」という表現が10文使われており、「に決まっている」は話し手の確信の気持を表す表現とも言える。このように話し手の確信を表す表現は聞き手の再認識化させるのに一番適切な表現であると考えられる。

例 20)

「な、なにこれ!？」心して箱を開けるとカニのリング。

「カニカニ！」蟹原がおどける。「はあ。」「何怒ってんだよ。」

「当たり前でしょう。何このカニって。私こんなケースに入った

指輪貰うの初めてなの。」(トップキャスタ)

例20)では「当たり前」が使われているが、これは聞き手に対する話し手の「当然のことなのになぜ聞くのかやなぜ知らないのか」などといった気持ちを表す表現であり、聞き手を再認識化させる役割をしていると考えられる。

例21)

「そうですよ。椿木さんは、何も見ていない。椿木さんだけではないぞ。俺たちも、何も見ていないんだからな。」と石場
「見たじゃない。」椿木さん、これを告発しようとしているんですか。」と望美。「するべきでしょう。私たちは、報道の人間よ。」(トップキャスタ)

例21)は、聞き手は告発する理由が分からないが、話し手はそのような聞き手に「告発しないといけないのである」という気持ちを伝えたい文である。話し手の気持ちを表すのに「するべき」という義務を表す表現は聞き手を再認識化させるのに適切であると言える。

例22)

「すみません、今、霧島さんが上に捕まってて。」
「上って何だよ、いいから早くよこせ。」
「ですから、指揮系統が変わって何も出来ないんです。」
「そんなこと言ってる場合じゃないだろう。こっち見殺しにする気か。とにかく早くよこせ。」(ブラッディマンディ)

例23)

「資格が必要なのは無理ね。洗い物や掃除。わざわざ家事みたいなこと外でやらなくてもね。人気のマスコミ業界。未経験OKだって。どう思う。」「」パソコンに向かう夫は無言。「ねってば。」「ずっと専業主婦だった40歳が簡単に採用してもらえるわけないだろう。大体何のためにやりたいんだよ。」

(アラウンド40)

例 22)と例 23)では「じゃない」と「わけない」という形式が使われているが、このような否定形式は全部 79 文で一番多く使用された形式である。話し手は聞き手の意見や立場などを否定したり、聞き手に忠告や説教をしたりして聞き手を再認識化させるためにこのような否定形式をよく使っていると考えられる。

例 24)

「薔薇の花…お花屋さんなのにどうして薔薇の花を売らないの。」「ああ…」「だって、普通に考えたら薔薇の花束って一番の売れ筋でしょう。」「まあ…」(薔薇のない花屋)

例 25)

「ああ。行けばいいんだろう。飯は。」「今やってるから。」「いくら何でも帰りが遅すぎるだろう。こんな時間まで息子を一人にて。」「だから今日はたまたまでしょう。」

(アラウンド 40)

例 26)

「雪平がそんなことを言っていたのか。」「いずれにせよ、警察が謝ればいだけじゃないですか。」「何言ってるんだ。」「だって事実でしょう。警察が広田の事故のもみ消しに関与してるら。」「安藤。貴様は何様のつもりだ。」「何様だなんて問題じゃないでしょう。」(アンフェア)

例 27)

「さあ。今日から営業頑張るわよ。」と瑞恵。
「営業たっていたいしたことやんないんだろう。」と夫彰夫
「そんなことないわよ。はいこれお願い。」瑞恵が彰夫にゴミを渡す。
「は。何で俺が。」「私は回覧板回してくるから。」
「ゴミなんか出してるところ見られたら恥ずかしいだろう。」
「今はねゴミ出しは立派な夫の仕事のひとつとして世間に認められててしない夫の方が恥ずかしいんだから。」(アラウンド 40)

例 24)から例 27)までは「だって」「(だ)から」「なんて」「たら」「たら」以外にも「と」「ば」「なら」「じゃ」などの表現が使われた例文もある)

の表現が文の中で共起している例文である。このような表現も聞き手を再認識化させるために付随的な役割をしていると考えられる。このような表現以外にも「というのは」「いくら何でも」「そんなことよりも」「～よりもまずは」などの表現も現れていた。

4.3 「だろう」と「でしょう」の再認識化3の用法

「だろう(でしょう)」の再認識化3の場合は動詞が56文(34.6%)、名詞が31文(19.1%)で一番多く使われていた。動詞の中でも「言う」という動詞が46文現れており、一つの形式(「言っていない」)を除いては全部肯定の形式であった。以下は調査結果の表であり、例文を挙げながら見てみることにする。

<表 3> 「だろう」と「でしょう」の再認識化3に共起する形式及び表現

形式及び表現	肯定	否定	合計
動詞	言った27、言っている15、言っていた2、話した2、約束した2、言ってくれた1、前置きした1、外された1、知っている1、話している1、教えてやったん1、作ってくれた1	言っていない1	55(34%) + 1(0.6%) = 56(34.6%)
名詞	約束4、仕事4、刑事2、担当1、公僕1、やったこと1、男1、謹慎中1、医者1、お前1、人間1、CNB1、人1、科学者1、部外者1、隣り1、花屋1、親族1、理事の一人1、ファンDMAネージャー1、瑞恵1、聡子1、岡村さん1、はず1、		31 (19.1%)
他の表現	前から1、30(歳)1、文句言っているだけ1、から1		4(2.5%)
共起する表現	って34、だから11、お前4、だって3、と2、いつも2、前にも2、何度も2、ただの2、っていう1、と1、なんて1、あり得ない1、そんなの1、そんなこと1、よく1、じゃ1、たら1		71 (43.8%)
合計	161(99.4%)	1(0.6%)	162(100%)

例28)

「結婚するのかその人と。」父友康が立ち上がる。
「男連れてくるってだけで大騒ぎするなよ。ただの一緒に働いている心理士さんだって言っただろう。」と達也。
「あ岡村さんですよ。ほらパパ。例の。」とマキ。

(アラウンド 40)

例28)では「言う」の過去形である「言った」が使われている。「だろう(でしょう)」の再認識化3は、話し手は聞き手に言ったことや行動したことを再び発言する用法なので「言う」という動詞が多く使われていると考えられる。また、過去のことなので「言った」や「言っている」や「言っていた」のように活用された形式でよく現れていた。

例29)

「何度も話したでしょう。あの男はうちの中に閉じこもったまま、滅多に姿なんか見せないんだから。」(ガリレオ)

例29)も話し手が聞き手に言ったことを再び発言する場面で「話した」が使われている文である。この例文では「何度も」という表現が使われているが、このような表現は聞き手の認識を再認識化させるために付随的な役割をしていると考えられる。

例30)

「まだ寝ないの。」「うんもう少し。」工作中的の奈央。「終わったら俺の部屋くれば。」「平日はお互いの生活を尊重するって約束でしょう。」「はい。森村さん。」(アラウンド40)

例30)では「約束」という名詞が使われていたが、「約束」という動作も過去に話し手と聞き手両者が口頭で発言した結果約束ができたということなので「言った」や「話した」と同様の形式であると考えられる。また、この文では「って」という表現が使われているが、話し手が聞き手に発言したことをまた言う場面であるためこのような表現がよく使われていると考えられる。また、「だろう(でしょう)」の再認識化3の

場合には「って」が34文で現れていた。

例31)

「普通に頼んでもダメなの。搜索願い出したって、事件性はない取り扱ってくれない。」と弥生。「僕も、どうしたらいいか。」と村瀬。

「でも、私に個人的に相談されても。」と薫。「刑事でしょう。この人本当に刑事なの。」と弥生。(ガリレオ)

例31)は「刑事」という名詞が使われている場合であるが、聞き手も当然自分が刑事なのは知っており、話し手は聞き手にその事実を再び言って聞き手を再認識化させている。このように「だろう(でしょう)」の再認識化3の用法で名詞が使われている場合は殆んどが聞き手の立場を表している名詞であった。表3で見たように「男」や「謹慎中」や「医者」や「親族」などの名詞であり、このような名詞の中では聞き手の名前(瑞恵や聡子など)も見られた。

例32)

「そういうことで、無関係者には出ててもらいましょう。」

「くそ。」

「だから、落ち着けて言ったらろう。お前が冷静にならないとどンドン状況が不利になって行くぞ。」(アンフェア)

例32)では「だから」という表現が共起している場合であるが、再認識化3の用法は話し手が聞き手に言ったことや行動したことを「再び発言する」場合なのであるため「だから」という表現が使われていると考えられる。再認識化3の用法の文では「だから」が11文も現れていた。

例33)

「それにこのレジ袋だって貰わなくて良かったんじゃない。ペットボトルとガム1個だけなら袋入りませんって言わなくちゃ。」「ケチ!」

「そうじゃない。いつも言ってるだろう。ケチじゃなくてエコ。」
(アラウンド40)

例34)

「それって岡村さんのこと。」と瑞恵。「それっておノロケ。」
と奈央。「ノロケとかそういうんじゃないってさ。」「いいわ
ね。これから結婚っていう人は。」と瑞恵。「先輩の結婚相手
として岡村さんはベストだもん。」と奈央。「いやだから前にも
も言ったでしょう。そういうことはまだ全然考えてないん
だってば。」(アラウンド40)

「だから」以外にも例33)と例34)のように聞き手を再認識化させる役割をしているような表現(「いつも」「前にも」)がいくつか現れていた。

5. 結論

以上「だろう(でしょう)」が再認識化用法として使用されている場合どのような形式や表現と共起しているのかを見てきた。その結果をまとめると以下ようになる。

「だろう(でしょう)」の再認識化1の場合は動詞が18文(61.1%)で一番多く使われており現在形動詞が過去形動詞より2倍使われていた。話し手が現場で聞き手を再認識化させる場合は現在形が使われ、過去にあったことについて聞き手を再認識化させる場合には過去形か結果の状態を表す「～ている形」が使われていた。また、「だろう(でしょう)」が再認識化1の用法として機能するのに付随的役割をしているような表現で「見ろ」「だって」「ほら」「さっき」などの表現が見られた。

「だろう(でしょう)」の再認識化2の場合は動詞が83文(21.4%)、他の形式が104文(26.7%)で一番多く使われていた。その中でも他の形式の否定形が79文(20.3%)で一番高い比率を占めている。

再認識化2の場合は「に決まっている」や「当たり前」や「するべき」などの話し手の確信を表す形式がよく使われており、このような表現は聞き手の認識を活性化させるのに適切な形式であると考えられる。こ

これらの形式以外にも普通の動詞や名詞も使われていたが、殆どどの文で聞き手を再認識化させるために付随的な役割をしている表現(「だって／(だ)から／なんて／仮定表現／というのは／いくら何でも／そんなことよりも／～よりもまずは／つまりなど」)がよく共起していた。

また、再認識化2の場合では否定形式の中でも「じゃない」や「わけない」という形式がよく使われていたが、このような形式は聞き手の意見や考えなどを否定したり、聞き手に忠告や説教をしたりするための形式であると考えられる。そのため再認識化2の用法でよく現れていると言える。これら以外の否定形式である「ことない」「関係ない」「はずない」「しょうがない」「仕方ない」などの形式も使われていた。

「だろう(でしょう)」の再認識化3の場合は動詞が56文(34.6%)、名詞が31文(19.1%)で一番多く使われていた。動詞の中でも「言う」という動詞が46文(28.4%)現れていた。「だろう(でしょう)」の再認識化3は、話し手は聞き手に言ったことや行動したことを再び発言する用法なので「言った(「言っている」と「言っていた」も含む)」や「話した」や「約束した」という形式が多く使われていると考えられる。このような形式がよく使われているため「って」という表現も34文で共起していた。この表現以外にも「だから(文頭の「だから」)」「だって」「いつも」「前にも」「何度も」などのような表現が共起していたが、これらの表現も再認識化3の用法として機能するのに付随的な役割をしていると考えられる。

また、再認識化3の場合に名詞が使われる場合もあったが、殆どが聞き手の職業や立場などを表している名詞であった。このことは話し手が聞き手の職業や立場を再び言って聞き手のやることなどを再認識化させていると言える。

このように「だろう(でしょう)」の再認識化1と2と3の用法の文でどのような形式や表現が共起しているのかを見たが、上述したように各用法ごとに共起する形式や表現が異なるのが分かった。これらの形式や表現が共起すると必ず再認識化の用法で使われるというわけではないが、このような形式や表現が使用される傾向があることだけは学習者に学習してほしい。学習者が「だろう(でしょう)」を学習する際にこの

ようなことまで学習しておく、実際の会話の場面で聞き手を再認識化させたり、聞き手に失礼な言い方にならないようにしたりするときに役に立つと考えられる。

用例出典

「アラウンド40」「アンフェア」「1リットルの涙」「エンジン」「ガリレオ」「クロサギ」「結婚できない男」「鹿男」「東京湾景」「トップキャスタ」「薔薇のない花屋」「ブラッディマンデイ」(<http://www.dramanote.com>)

参考文献

- 権城(2018)「推測表現の語用論的な用法の日韓対照研究-「だろう／はずだ／かもしれない」を中心に」『日本語文学』第77輯、韓国日本語学会、pp.33-52.
- 権珍美(2001)『「だろう」의 의미와 용법에 관한 一考察 - 한국어와의 대응관계를 중심으로 -』한양대학교대학원석사학위논문, pp.5-22.
- 朴英熙(2008)『「ダロウ」に関する一考察 - 文体の違いを中心に -』韓国外語大学校教育大学院修士学位論文、pp.5-55.
- 金水 敏(1992)「談話管理理論からみた「だろう」」『神戸大学文学部紀要』19、神戸大学文学部、pp.41-59.

<Abstract>

Analysis of the Usages of Reactivating the Hearer's
Recognition and its Implications for Learners of Japanese
– Focusing on the Forms Concurrent with *Darou* or *Deshou* –

Kwon, Seong

In this study, we analyze the usages of *darou* and *deshou* to reactivate the hearer's recognition, especially its concurrent patterns with other forms or expressions. For the usage 1 of *darou* and *deshou* to reactivate the hearer's recognition, verbs are most frequently used, with almost the same frequency rates both in present and past tenses. Furthermore, they are concurrent with expressions such as *miro*, *datte*, *hora*, and *sakki*. For the usage 2 of *darou* and *deshou* to reactivate the hearer's recognition, the most frequently attested forms are verbs and negative forms such as *janai* and *wakenai*. They are also frequently concurrent with expressions which concomitantly reactivate the hearer's recognition, such as *datte*, *(da)kara*, *nante*, and hypothetical expressions. For the usage 3 of *darou* and *deshou* to reactivate the hearer's recognition, verbs and nouns are mainly employed; in particular, there are 46 sentences in which the verbal forms *itta* (including *itteiru* and *itteita*) appear. Also, there are 34 sentences where *tte* appears. Apart from *tte*, other concurrent expressions include sentence-initial *dakara*, *datte*, *itsumo*, *maenimo*, and *nandomo*, and these expressions also serve to instantiate the usage 3 of *darou* and *deshou* to reactivate the hearer's recognition. Moreover, nouns are used in the case of the usage 3 of *darou* and *deshou* to reactivate the hearer's recognition, and they mostly denote the hearer's occupation or title. These research findings, especially those concerning the concurrent patterns of *darou* and *deshou*, would help learners of Japanese to communicate with people in actual conversational settings.

Key words : *darou* (*deshou*), reactivating the hearer's recognition, concurrent form, concomitant role

투 고 일 : 2019년 10월 13일

심 사 일 : 2019년 10월 18일

게재확정일 : 2019년 11월 9일